



脚本を書く時はスケッチブックに絵を描いてイメージを膨らませる



手掛けてきた脚本の台本



信長と家康の旅のしおりをイメージ

アイデアを書き留めるスケッチブック

# あつきびと 熱気人インタビュー 脚本家 古沢 良太さん

厚木市出身の脚本家・古沢良太さんが紡ぎ出す物語は、映画やドラマ、舞台などの作品になり、多くの人を引き付けています。昨年はNHK大河ドラマも手掛けた古沢さんに、脚本家の道を歩み始めたきっかけや、生まれ育ったまちのことなどを聞きました。

【プロフィール】1973年厚木市生まれ。2002年第2回テレビ朝日21世紀新人シナリオ大賞を受賞し脚本家としてデビュー。06年「ALWAYS三日月の夕日」で第29回日本アカデミー賞最優秀脚本賞を受賞。昨年のNHK大河ドラマ「どうする家康」の脚本も手掛けた。主な作品に「キサラギ」「相棒シリーズ」「探偵はBARにいる」「リーガル・ハイ」「少年H」「寄生獣」「コンフィデンスマンJP」「レジェンド&パタフライ」「映画ドラえもん のび太と空の理想郷」などがある



## 脚本家として

脚本家の仕事に興味を持たれたきっかけを教えてください。もともと絵を描くのが好きで、漫画家になりたいと中学生ぐらいから思っていました。当時、手塚治虫先生が「漫画家になりたければ、一流の映画を見なさい」と言われていたのを真に受けて、物語の作り方を勉強するために古い映画なども見始めました。テレビっ子だったのでドラマも好きでした。当時、黒澤明監督の映画がビデオになっていなかったのが、図書館にあった脚本集を借りて読むようになり、ああ脚本書くのも面白いなと思うようになりました。

初めは漫画家を目指していたんですけど、中学生の頃は、友達に「絵がうまい」と褒められて、調子に乗って、先生をキャラクター化した4コマ漫画などを学校新聞に描いていました。漫画家になりたいと思ったのは、藤子不二雄先生の「まんが道」を読んだからです。中学生の頃に買った本を今も持っていますよ。高校・大学と投稿して賞に入ることもしましたが、デビューには至りませんでした。

脚本家の道を選んだ転機は？ 1年間通ったシナリオのスクールで、初めて脚本というものをちゃんと1本書いて、それをすごく先生に褒めてもらって、ちょっとそこで自信が湧いたっていうのはありました。ただ、本当に書くのが大変で。こんなことを仕事にはできないと思ったり、やっぱり絵を描くのが好きだから漫画家になりたいと思ったりして、就職もせずブラブラしている時代がありました。それで、27・28歳ぐらいの時に、ちゃんと、夢を追うなら追う、やめるならやめると、はじめをつけようと思って、テレビ局主催のシナリオコンクールに応募しました。それが大賞に選ばれ、そのまま連続ドラマの脚本家の一人に入れていただいたという感じでした。

脚本を書く大変さを教えてください。漫画も大変だし、うん。やっぱり、多くの作品を見たり読んだりしていると、誰でも批評家としての目は持っているじゃないですか。でも自分が書くとなると、こんなものしか書けないのかっていう壁に直面して。批評家としての目が高ければ高いほど、創作者としての力のなさに絶望して、嫌になって、最後まで書けないというのがほとんどの人だと思えます。目指したけれどやめちゃうんです。でも、とりあえず、恥をさらけ出す覚悟で最後まで書き切るってことが本当に、なかなか難しいことですよ、それは。しかもそれを人に見てもらって、批評を浴びるって

うのは。人に見せるに値するほどの面白い話を考えるって、簡単なじゃないですか。それを、毎週のように考えて書いていく仕事って、ちょっと想像できません。私たちが脚本そのものではなく、多くの方の手を経て出来上がった映画やドラマを目にします。古沢さんはどう捉えていますか。

もちろん楽しみと不安と両方ありますよ。ただ、僕の思い描くものは僕の中にしかなくて、文字で伝えるのには限界があるので、受け取った人がどう表現するかは、また別なので。極端に言うとう、思い描いていたものとは常に違うものが出来上がってくるんですよ。でも、僕が目指したものが出来上がるのがゴールではなくて、見てくれた人が楽しんでくれるものを目指してみんなで作るもの。お客さんが喜んでくれれば僕はそれでいいんです。いろんな人のセンスやアイデアが入り交じっているのが、ドラマや映画の面白いところだし、みんなものを作ることに醍醐味だと思っています。

脚本を書くときに大事にしている事や、心掛けている事はありますか。心掛けてる事・・・いや、あるはずですよ。いろんな仕事の誘いを頂ければ、やっぱり自分として、情熱を注げるかどうかということが多分一番大事で、チャレンジしてみたいとか、やりがいを見いだせるかということ、一方で、自分のために作るわけではないので、受け取ったお客さんたちの多くが喜んでくれるだろうという、この二つの円が重なる所を見つけてっていうこと、あとは、楽しむことかなと思います。

脚本家を選んでよかったと思う瞬間はどんな時ですか。選んでよかったと思うのは、そうですね・・・でも、常に思っています。日々思っています。作り話を書いて、みんな喜んでもらって、お金ももらっているわけなので。ありがたいことだと思ったり、どの瞬間とかではなく、やっぱり、考えたり書いたりすることが好きで、創作する人生を送れているということそのものが、最大の喜びというか、幸せなことだと思います。

## 厚木のこと

創作が好きなのは何かに影響を受けて。周りにすごく子どもが多くて、時代的には、僕が生まれ育った辺りには、商店街がありました。当時、実家が商店で年の近い子がいっぱいいて、毎日遊んでいました。画用紙を買ってきてボードゲームみたいなものや、すごろくゲームみたいなものを自分たちで考えて作ってしま



穏やかな口調で丁寧に質問に答える古沢さん

**図書展 脚本家・古沢良太を作った本**  
古沢さんが学生時代に中央図書館で手に取った本や、手掛けた脚本に関わる本などを展示・貸し出します。  
中央図書館 ☎223-0033  
《期間》1月31日まで  
《内容》関連書籍約50冊と直筆サインなどを展示

**2025年1月リニューアルオープン**  
文化会館の利用受付を開始  
1年後のオープンに向けて、施設貸し出しの受け付け・抽選を順次実施していきます。  
文化会館 ☎225-2588  
受け付けや抽選の詳細は文化会館HPに掲載。  
詳細はこちら

**これから**  
これから手掛けてみたい作品はありますか

**サイン入り色紙をプレゼント**  
《対象》市内在住の方2人  
市公式LINEの応募フォームまたはハガキに古沢さんの色紙希望の旨と〒住所、氏名、電話番号を書き、1月31日(必着)までに〒243-8511 広報課 ☎225-2040へ。抽選。  
※当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます。



脚本の構成を書いたメモ



1985年頃の本厚木駅周辺の街並み